新社長に聞く

The New President Interview

ステンレス鋼線のトップメーカー、日本精線の新社長に利光一浩氏が6月29日付で就任した。ステンレス鋼線と金属繊維を軸に独自性に優れた高機能製品の供給を通して幅広い分野へ貢献し、近年は需要増加が見込まれるサステナビリティー関連の新製品・技術開発を加速させている。利光社長に抱負や今後の取り組みなどについて話を聞いた。

日本精線
利光 一浩氏

▽利光一浩（としみつ・かずひろ）氏＝85年南山大法卒、大同特殊鋼入社。17年執行役員、20年4月常務執行役員、同年6月取締役常務執行役員、22年4月代表取締役副社長執行役員。座右の銘は「謙虚であれ」。高校、大学、社会人とラグビーに打ち込んだ。大阪勤務は2回目で、「妻と一緒に関西の温泉巡りを楽しみたい」。名古屋育ちだが、寅年生まれなことから阪神タイガースファン。62年8月24日生まれ、愛知県出身。

自然エネ分野の販売拡大

――就任の抱負から。

「本年度で最終年を迎える中期経営計画を遂行する。社員には中計の確実な実行、サステナブル課題の解決、変化の重要性、やりがいの4つを伝えた。これからは予測不能の時代となる。最初の1歩を踏み出すのは難しいが、自分たちが変化することでどんなことにも対応できる人になってほしい。そして、自分の人生、仕事の中でやりがいや生きがいを見つけてもらいたい」

――今期（24年3月期）が最終年となる3カ年中計「NSR23」の進ちょく状況は。

「3年平均で連結売上高420億円、連結経常利益42億円の達成が見えてきた。日本精線リニューアル計画の継続と推進、高機能・独自製品の拡販によるサステナビリティーへの貢献、水素を巡る新事業の探索などを骨子に取り組んでいる」

「設備投資は3年間で総額57億円を予定しており、ほぼ計画通りに進んでいる。本年度は東大阪工場（大阪府東大阪市）の酸洗設備の合理化や、枚方工場（大阪府枚方市）の極細線・ばね用材の機能能力増強などを計画する。耐震補強工事などを実施し、安全性を高めた職場環境の改善を図る」

――現在の需要環境は。

「22年度第1四半期をピークに生産量は落ち込みが続いている。ステンレス鋼線の生産量は今年1―3月の月平均で月間約2900㌧だった。好調な時から2割ほどの減少となり、建材向けの低迷などが影響した。今後は自動車向けの回復を見込んでいる。一方、極細線の太陽光発電向けは引き続き好調に推移している」

――海外関連会社の状況は。

「海外拡販の拠点でステンレス鋼線を製造するタイ精線は世界経済の景気減速の影響を受け、ステンレス鋼線の販売数量が低迷している。中国の耐素龍精密濾機（常熟）は昨年回復基調にあったアパレル分野向け金属繊維フィルターの需要が落ち込んでおり、またシャフト用クロム系ステンレス鋼線を製造する大同不銹鋼（大連）は自動車生産数減少の影響を受けている。今後の全体的な景気の持ち直しに期待したい」

――新製品・新技術の開発状況は。線径9マイクロメートルの極細線の実用化にも期待がかかる。

「太陽光ソーラー発電設備製造などに使われる極細線は、現在の11マイクロメートルよりもさらに細い9マイクロメートルの開発を進め、試作段階に入っている。当社にしか製造できない高付加価値製品で、太陽光パネルの発電効率向上に大きく寄与する」

「風力発電用炭素繊維は、風車のブレード（羽根）全体に使用され、軽量で強度が高い。この炭素繊維の製造工程には当社のナスロンフィルターが貢献している。風力発電設備は今後も需要拡大が見込め、積極的にナスロンフィルターの販売を広げていきたい」

――水素関連事業の取り組みも拡大している。

「水素貯蔵や水素回収、水素分離膜の各モジュール技術を基に、大学や関連機関との研究を継続している。枚方工場に建設した小型プラントでは、MCH（有機ハイドライド）から触媒ワイヤを用いて高純度の水素を回収する実証実験を開始する」

――サステナビリティー経営により力を入れていく。

「CO_2排出量削減のため、まずは熱処理炉・ボイラーの廃熱利用などエネルギーロスの削減を促進している。将来的には熱処理炉の更新も検討し、使用するエネルギーのCO_2フリー化を目指す。当社の高機能・独自製品はSDGsに貢献するものが多く、22年度売上高の64%を占めている。今後はこの比率をさらに上げていきたいと考えている。お客さまのニーズを的確に把握し、ナンバーワン、オンリーワンの製品をさらに拡販していきたい」（篠原　沙綾）

※本記事は産業新聞社の承諾を得て掲載しており、著作権は産業新聞社に帰属します。